

*Winter's Tale* に於ける「時」の技法

島崎静子

SHIZUKO SHIMAZAKI

## 序

すでに前回の論文<sup>1)</sup>で述べた様に、中世から近世、さらに今日の哲学者の格好のテーマである「時」の特性をシェイクスピアが巧みに取扱い、舞台に於ける効果を絶妙なものにしている。「時」には二つのものがあり、一つは万人のうえに共通に絶えず流れ続ける物理的な時間であり、それを「客観的時間」と言う。アリストテレス等が提唱した考えである。もう一つは、人それぞれが、様々な環境のもとで、物理的には一定の時間でしかないものを「短く」感じたり、「長く」感じたりするもので、それを「主観的時間」と言う。これは人間の心との関わり、つまり意識との関わりなしでは「時」を考える事はできないと言ったアウグスティヌスの唱える考えである。特にシェイクスピアはこの「時」に感心を持っていたらしくコンコーダンス<sup>2)</sup>で「time」の語を調べてみるだけで、いかに多く「time」という語に言及しているかがわかる。悲劇は、主人公の、苦悩、野心等といった人間の内面に於ける世界を題材とすることが多い為、必然的に主観的時間の世界を全面に出す形態をとるものがほとんどである。「苦悩」、「野心」や「復讐心」が渦巻く主観の世界はほとんど他人を寄せ付けず、暗くて流れが澱んで停滞している時間の闇の世界である。この闇の主観的時間の世界に対して客観的時間の世界は現実と真実を光の元にさらけ出す世界である。シェイクスピアはこの闇と光の相反する世界をうまく利用して劇的效果をあげている。

*Winter's Tale* はシェイクスピアの後期の作品であり、シェイクスピア自身の人間としての集大成であると評されるものの一つである。この作品は劇が前半と後半に分かれ、その間に十六年もの月日が流れる構成となっている。いわゆるロマンス劇と称するもので前半では苦悩や嫉妬や猜疑心などで渦巻く人間の感情の経緯、即ち苦悩や嫉妬などの感情の世界（主観的時間の経過）を描き、後半は一転して明るい現実の客観的時間の世界を繰り広げ、テーマは、和解や歓喜に変わっていく。

この作品は「嫉妬」のテーマに関しては *Othello* と同様であるが、劇中で展開される主人公の「軽いやきもち」から「嫉妬」へ、そしてその「嫉妬」から「猜疑心」と「妄想」へと邪心が増幅し、自分の心の平安を妨げるものは全て抹殺しようとしている点で、前回論じた「*Macbeth* に於ける『時』のテーマ」のなかの *Macbeth* 自身にひじょうに類似しているので、この事に言及しながら論述を進めていきたい。

*Winter's Tale* と言えば、同様に「嫉妬」が原因の悲劇である *Othello* を比較検討の対象にするのが自然であるように思われがちであるが、悲劇を引き起こす発端となる「嫉妬心」は同じものであっても、悲劇に至るまでの過程に大きな違いが見られる。*Othello* の場合は主人公 Othello を陥れるために行われる Iago の巧みな策略に観客達の目、耳が釘づけにされ、Othello 自身の内面の疑心暗鬼や嫉妬や苦悩を共有する程の余裕が与えられないのである。実際、Iago による巧妙な策略はこの劇のほとんど全体を占めているため、主人公 Othello に関するより Iago に関する研究が多くみられる程である。観客が Othello の心の動揺や怒りを見るのは決まって Iago が Desdemona の中傷を彼の耳に注いだ断片的な時である。Othello は Iago の中傷に必ず「証拠」を見せる事を求める。そしてすっかり Iago の毒に犯された Othello が Desdemona を殺害する時にも、観客は決して Othello の口から罵りの言葉を聞くことはない。Othello は Desdemona を愛するがゆえに、これ以上罪を犯してもらいたくないと願う気持ちから妻を殺すのだと言う。観客は誠に人格者たる武将の誉れたかき主人公の姿を見ることになるが、ここに至っては、あまりにも崇高な Othello の気持ちを共有することもできず、Iago の巧みな策略に感心するだけで、ただ額縁のような舞台で繰り広げられる出来事に見入るだけである。

この点、*Macbeth* は一領主であった *Macbeth* が「野心」の化身となり、不正な手段で王位を手に入れるが、劇の至る所で、彼の人間らしい苦悩、恐怖、厭世観などを切なく独白する。勿論、この劇においても、主人公の「野心」に外からの働きかけるものは存在する。三人の魔女と意志強固な妻 *Macbeth* 夫人である。確かに三人の魔女の予言めいた「人を惑わす」言葉も、王位を手にするには手段を選ばない *Macbeth* 夫人の力も主人公の「野心」に大いに影響を与えるのは事実だが、それ以上に *Macbeth* 自身が口にする厭世的な言葉や猜疑心にかられてじっとしていることのできない姿、そして恐怖心からどんな物音一つにもビクリとしてしまうその姿に観客達は共感し、*Macbeth* の内面、即ち主観的時間の中に入り込み、彼と共に暗闇で熊のようにうめき回ることができる。

この点 *Winter's Tale* の主人公 Leontes は *Macbeth* と同様に人間らしい「嫉妬心」や「猜疑心」や「心の不安」を常に全面に出している為、客観達は彼等の姿に共感することができ、舞台と観客席が一体化し、闇の主観的時間の世界が確立される。

### 客観的時間の世界から主観的時間の世界への移行

*Macbeth* は戦いを終え、戦友の Banquo と共に霧深い荒野を歩き、突然何処からともなく現れた三人の魔女に会い、心の奥底に潜ませている野心を刺激されるまでは客観的、物理的に流れる時間の中に存在している。観客達は戦争があったこと、そしてそれが終り、二人の軍人が主人の元へ帰る途中であることを、そしてその途中で不気味な魔女達に遭遇したことを時間の経過を追って知らされるのである。この時点に於いては劇を演ずる者もそれを観賞する者も同じ次元に居る。即ち、国王 Duncan の使者より「Cawder の領主」に任ぜられた事を知らされ、魔女達の「予言」が実現したと思い、密かに彼女等の次の「予言」もまた実現するかも知れないと考えるまでは、*Macbeth* は確かに客観的時間の中に居た。ところが、そう考えた途端に彼は主観的時間の中に入り込み、客観的時間へ戻るができなくなってしまう。*Macbeth* は *Macbeth* 夫人の外部からの強力な野心に押されながら「主観的時間」の奥深くまで入り込み始める。聖オーガスチン等が唱える様に「万物の生成を統括するのは『時』である。」ところが *Macbeth* 自身がその「時」の座についてしまい、全ての物を自分が造りだそうとしている。*Macbeth* が主観的時間に入り込もうとするにつれ、急激に大宇宙と小宇宙の秩序が合い揃って乱れ始める。もう、観客達は自分

達の上を流れる自然の時間から離れて、閉鎖された主人公Macbethの内で渦巻く野心と恐怖と猜疑心の世界に閉じ込められてしまい、そして舞台と観客席が一体となって静止した時間の中で浮遊し始める。

*Winter's Tale* の四幕の冒頭で「時」そのものが登場してきて以下の様に述べる：

since it is in my power  
To o'erthrow law and in one self-born hour  
To plant and o'erwhelm custom. Let me pass  
The same I am, :I witness to  
Or what is now received :I witnessed to  
The times that brought them in, so shall I do  
To th'freshest things now reigning, and make stale  
The glistening of this present, as my tale

法律をくつがえすことも、  
ある習慣を植えつけると同時に根こそぎ引き抜くことも、  
私の権限なので、最古の秩序が生まれる以前も、  
現在の秩序が支配しているいまも、私はいつも  
同じ私であるとお思い下さい。私は秩序の生みの親である  
過去の各時代を目撃してきました、同様にいま栄えている  
もっとも新しい秩序を目撃し、そのしんせんな輝きを  
今の私の話と同じく陳腐なものといたします。

(IV, i, 8-14)

「時」は「時」自身の役割を説明しているのである。ここにおける「過去の時代」も「時」そのものに他ならない。Macbethは「Cawder」の領主になったことを告げられ、今度は「王」になるかもしれないと思った途端に彼自身が「時」の位置に治まってしまったのである。しかし彼の生み出す物と言え、**「秩序」ではなく「混沌」であり、「恐怖」であり、「不安」にしかすぎなかった。**もしもマクベスが主観的時間に幽閉されず、物理的、客観的時間に身を委ね、そして魔女達の予言めいた言葉が「Cawder」の領主の場合と同様に実現するものなら、彼は何の罪も犯さずに「王」になっていたはずである。ところが彼自身の野心も夫人の野心も「時」の経過を見守る程、冷静ではなく、まして Malcolm という前途を阻む者が現れた時、彼らの野心は性急さが加わり、化け物の様に巨大化してしまう。万物を生成するのはもはや「時」ではなくマクベス自身である。

<sup>3)</sup> *W. Knight* が評するように：

Nothing is, but what is not.  
無いものを除けば、在るものはただ無いもののみ。

(I, iii, 142)

と独白した Macbeth はもはや現実の世界をはみ出し、非現実な世界に入ったことを露呈している。「現実的な世界」とはまさしく客観的、物理的な時間の流れる世界であり、「非現実の世界」とは Macbeth 自身の野心や恐怖が渦巻く内面の意識の世界、即ち彼の主観的時間の中の世界を意味する。この時点で Macbeth は客観的時間の世界から自分だけの主観的時間の世界へと移行

したのである。

*Winter's Tale* の場合に関して論ずるならば、主人公 Leontes を客観的時間から主観的時間に移行せしめたのは彼自身の中にふと沸き出てきた「嫉妬心」であった。Othello がただひたすら Iago によって「嫉妬」の毒を耳から注ぎ込まれることによって無垢な妻 Desdemona を自らの手にかけて殺害してしまうことになった過程とは全く異なる。Othello の場合、最後に Iago の妻 Emilia によって、Iago が Othello の耳に入れた話は全て事実ではない事を知らされるまでは、それと気づかせる人も現れないし、事件も起きない。ところが、*Winter's Tale* の場合、Leontes のみが頭で疑念を次々造りだし、周囲の人々が、いかにそれが邪推にすぎないかを説得しようとしても全く意に介しない。この点に於いて、Othello と Leontes の間には、大きな相違点を見ることができる。

*Winter's Tale* は「時」を論ずるのに相応しく、開幕と同時に「時」のテーマを暗示する言葉のやり取りから始まる。まず Camillo はシチリアの王 Leontes とボヘミヤの王 Polixenes がいかに幼少の頃から仲睦まじく育ってきたか、そして長い年月が経った現在も二人の友情は少しも変わらないでいる事実を述べ、今後もこの友情がそのまま変わらないでいてくれることを祈る。そしてその二人の友人と Leontes の妻 Hermione が登場し Polixenes の滞在を延期するか否かをめぐって話が展開される。ここに於ける「滞在の延期」はまさに「時間」に関するテーマを暗示するものである。しばらく Leontes と Polixenes の間で押し問答がなされるが、どうしても滞在を延期してくれそうにもない事がわかると、Leontes は妻の Hermione に助力を求める。Hermione は夫が Polixenes に抱く友情と同じ友情をもって、シチリアにもう少し滞在してくれることを懇願する。そして熱心な彼女の懇願に、幸運にもと言うべきか、不幸にもと言うべきか、Polixenes はもう少し滞在を延期することに同意してしまう。この時の Leontes の独白と Hermione との会話は、これから起こるであろう不幸を予言するものである：

Leontes. Is he won yet ?

Hermione[turns]. He'll stay, my lord.

(Leontes. At my request he would not....

[aloud]Hermione, my dearest, thou never spok'st

To better purpose.

Hermione. Never?

Leontes. Never, but once.

Hermione. What? Have I twice said well? When wasn't  
before?

I prithee to tell me: . . . . .

.

.

.

Leontes. Why, that was when  
Three crabbed months had soured themselves to death,  
Ere I could make thee open thy white hand,  
And clap thyself my love: then didst thou utter  
"I am yours for ever."

リオンテイズ：どうだ？説得できたか？

ハーマイオニ：ご滞在くださるわ。

リオンテイズ：おれが頼んでもだめであったが。

嬉しいぞ、おまえのことがこれ以上りっぱな働きを  
見せてくれたことはなかった。

ハーマイオニ：なかった？

リオンテイズ：そのときというのは、

渋柿のようなつらい三か月を噛みしめ終わったあと、  
ようやくおまえがその白い手を開いて、おれの愛をしっかりと  
つかんでくれたときだ。お前は那時、こう言った、  
「私は永遠にあなたのもの」と。

(I,ii,86-105)

一度目はりっぱな夫を永遠に自分のものに、二度目は夫の友人の滞在を延ばすのに成功したことだと知った Hermione は無邪気に喜びながら Polixenes に接している。その姿を離れた所から眺めながら Leontes は何処からともなく沸いて出てくる嫉妬心に独白して言う：

リオンテイズ：（傍白） あれの熱心さは  
度がすぎる。友情の交換も度が過ぎると情欲の交換となる。  
この胸騒ぎはなんだ、喜びではない。・・・

・  
・  
・

(I,108-119)

Leontes の心に嫉妬心が芽生え始めたのはこの時点である。抑さえる事のできない嫉妬心に Leontes は思わず次の様に独白してしまう：

Affection! thy intention stabs the centre :  
Thou dost make possible things not so held,  
Communicat'st with dreams -how can this be?-  
With what's unreal thou coactive art,  
And fellow'st nothing:

愛欲というものは！ いったん狙いをつけたら過たず  
人の心臓を刺しつらぬく。不可能と思われることを  
可能にする。夢と言葉を交わしあい、信じられぬ話だが、  
現実には存在しないものと手を取りあい、空なるものと  
心を通じあう。

(I,ii,138-143)

Leontes はこう独白した時点から客観的時間から主観的時間へと移行し始める。そしてまことに興味深いことに、この彼の独白は Macbeth が国王の地位を確実なものとする為、現国王 Duncan を殺害しようと野心に拍車をかけられて独白する言葉 “Nothing is, but what is not. (I, iii, 142)” と妙に一致するのである。おそらく Macbeth も Leontes もこの時点をもって現実の世界から彼等自身の内面的な世界、即ち、実態のない非現実の世界へと入り込んだのだろう。Leontes 自ら生じさせる嫉妬心はもはや誰にも止めることができなくなってしまった。自分の友人 Polixenes に対して妻である Hermione が夫の分まで大切に接する姿を見ては Leontes は嫉妬心をつのらせていく。主観的な時間に入り込んだ彼は、Polixenes と Hermione の関係を “(Aren't they) wishing clocks more swift? Hours, minute? noon, midnight? and all eyes / Blind with the pin and web but theirs; theirs only, / That would unseen be wicked? Is this nothing? (I, ii, 289-292) 一時間が一分の内に過ぎ去り、早く昼が夜になればいいと願っても？ 他人の目はすべてソコヒにかかってくれば、自分達の悪事が見られないですむと思っても？ それでもなんでもないと言うのか？” すっかり自分だけの世界にのみ住み始め、客観的世界に戻ることができなくなった Leontes は、単なる「やきもち」から真の「嫉妬心」を生じさせ、それが「妄想」を生み出し、Camillo に妻 Hermione を殺してしまうようにと申し付ける有様である。Leontes の兄弟の様な強い絆で結ばれていたはずの友 Polixenes に Camillo は絶望して言う：

Swear this thought over  
By each particular star in heaven and  
By all their influences! you may as well  
Forbid the sea for to obey the moon,  
As or by oath remove or counsel shake  
The fabric of his folly, whose foundation  
Is piled upon his faith, and will continue  
The standing of his body.

たとえあなた様が、天に輝く  
星の一つ一つにかけて、その影響力にかけて誓われても、  
王のお考えをくつがえすことはできませんまい。王にたいし、  
ご誓言やご忠告で愚かしい妄想をとりのぞこうとするのは、  
大海原にむかって月の力を受けるなど命じるようなもの、  
その邪推は信念の基盤に根をおろし、おからだの続くかぎり  
びくともしないと思われます。

(I, ii, 426-432)

誰にも入ることのできない Leontes の内面で流れる時間は、嫉妬、猜疑心、そして妻に裏切られたという屈辱感から来る怒りのみに占領され、本来の物理的時間が秩序良く流れるのに比して、それらの感情に流れは止み、Macbeth 同様、主観的時間という檻のなかでただ一人うごめくだけである。主観的時間の中に閉じこもり客観的なもの、即ち彼の考えていることや行為を比較検討し、正しい判断をくだす力はもうほとんどなくなってしまった。彼の内にある時間が生みだすものは全て現実の時間がつくりだす秩序とは正反対である。Polixenes を不義密通の科で殺害する

よう命じられた Camillo が王 Leontes を裏切り彼を逃亡させる。これを知った Leontes は自分の内にある現実とはかけはなれた判断力をそれとは知らずに鼓舞して言う：

Leontes:                   How blest am I  
In my just censure! in my true opinion!

おれもしあわせな男よ、  
正しい判断力、真実を見抜く力にめぐまれているとはな！

(II,i,36-38)

Camillo は実は正しく Leontes は間違った判断をしているのである。しかし客観的にもものを見ることのできない自分だけの世界にいる彼は全て逆の判断しかできない。“All’s true that is mistrusted: 疑ったことは全て真実であった。”と自分が Camillo を不忠者と思っていたが、それが正しかったといっているのである。猜疑心の塊になった Leontes は Hermione の宿している子供は Polixenes との不義の子であると疑い、その子が生まれると捨ててくるように、そして Hermione は牢獄に閉じ込めるように命じる。これらの Leontes の現実と倒錯してしまった感情の世界で行われる事はまさしく Macbeth のそれと同じである。<sup>4)</sup>猜疑心と恐怖に心を占領された Macbeth は「言葉」や「思考」は心に思い付いたことの実行を妨げるのみであると、次から次に正しいと思うことをやってのける。彼の「正しいと思うこと」は現実の世界では「悪いこと」である。このように類似した主観の世界に閉じこもった二人は、心の中にわきだす不安や恐怖に対して同じように自分を説得しようとする。Leontes は “Nor night, nor day, no rest: it is but weakness/To bear the matter thus: mere weakness”. (昼も夜も心の安まるときがない。あのことをこのように思い悩むのは、弱いからだ、心が弱いからだ。)と独白し、Macbeth は “Come, we’ll to sleep. My strange and self-abuse / Is the initiate fear that wants hard use: /We are yet but young in deed”. (まこと初心者のいまだく恐怖心。まだまだ酷しい訓練が必要だ。我々は行動の面ではまだ若輩にすぎない。)と Macbeth 夫人に告白している。Macbeth 夫人はそんな夫を見て、Macbeth に「人間の命を支える眠りが必要だ」と忠告する。Leontes は自分の心の不安の原因は不義を働いた Polixenes と Hermione であると思い込み、自分の影響下から逃げ去った Polixenes はどうすることもできないが、その片割れである Hermione は自分の手中にあるので、彼女をまず亡き者にすれば自分の心の安らぎも幾分かは戻ってくるかもしれないと考えて、それを実行に移そうとする。これは将来の至福を阻むと思われる Banquo とその息子の存在、そして Macduff と Malcolm に関して、Banquo の息子 Fleance は取り逃がし、Macduff も Malcolm も遠いイギリスへ海を渡って逃げてしまい、今直ぐにどうにもできないが、少なくとも今手中にある Macduff の妻子の存在を消してしまえば心の平安と安らかな眠りを取り戻す事ができると考えて、それを実行に移したマクベスと酷似している。

*Winter’s Tale* の Leontes の場合も Macbeth の場合も、あまりにも強い嫉妬心、猜疑心そして野心のみが支配する各人の主観的時間の中で外的な、客観的な時間の中で現存する事実を無視して、各人がそれぞれの世界を司る者になってしまったことがこれらの悲劇を作り出す要因となっている。しかしながら Leontes も Macbeth も客観的な世界に於ける真実を知りたいと思う力が残っている。Leontes はアポロの神託を求め、一方 Macbeth は魔女達の住処を訪れて事の真相を知ろうと試みる。ここで見られる大きな相違点は、前者がアポロ神という真理を司る神に事の真相を明らかにしてもらおうとしたのに対し Macbeth が求めたのは、あくまでも真理の世界とは

程遠い世界に住む魔女達の予言もどきであったことである。当然の結果として Leontes は自分があまりにも自分自身の疑いを強く信じ込んでいたことに気が付く。役人の読み上げるアポロの神託は Leontes の閉鎖された主観の世界へ外からまばゆいばかりの現実と真理の光をなげかけることになったのである。そして Leontes は自分の罪を恥じ Polixenes との和解を求め、すでに死んだものと聞かされた息子と妻 Hermione を一つの墓にほうむり、墓石の上に自分の犯した恥すべき行為を刻み込み後世にまで伝えようと申し出る。ここで Leontes は自分だけが中心にいることのできる主観的時間の世界から相対的にものを見ることのできる客観的時間の世界へと舞い戻ることができたのである。ところが Macbeth の場合、彼の求めていったものは彼自身が住む主観の世界をいっそう現実の世界から遠ざけるもので、真理や現実とは逆の価値観を持つ世界であった。従って Macbeth は外部からの光に触れることなく主観的世界の闇の中から抜け出す事ができず、その顛末は悲惨なものとならざるをえなかった。

### 「闇」の世界から「光」の世界へ

Macbeth の悲惨な顛末に観客は人間のもろさと自暴自棄になった時の凄さを思い知らされ、また彼の厭世感に肩を落としながら劇場をあとにする。そして Iago の妻 Emilia から真実を聞いて、自分の愚かしさを大声で何度繰り返しても、Othello 自身にも、それを観ている観客達にも心の救いは満足に求める事ができない。この後に残る暗い気持ちや厭世観、そしてどうしようもないもどかしさや残念な気持ちこそが「悲劇」の持つ特性であろう。

ところがシェイクスピアの作品を読んでいくに従って、悲劇 *Othello* や *Macbeth* で味わった救いようもない暗い気持ちや厭世観、そして残念で、もどかしい気持ちを一気に晴らしてくれる作品に出会う。それは *Winter's Tale* を含めたシェイクスピアの晩年の作品でロマンス劇と呼ばれるものである。上で論じた *Winter's Tale* は作品の前半に過ぎない。それを承知の上で取り上げたのは、そこまではまさしく悲劇そのものに違いないからである。ところがその後は驚くべき大胆な展開がなされ、観客をついに味わった暗い気持ちや残念な気持ちを払拭してくれる歓喜の世界へと誘うのである。

<sup>5)</sup>ところでこの *Winter's Tale* は劇を構成する「三一一致の法則」が無視されているという点であり古典的でないとされたが、シェイクスピアはこれをものともせず、自由、かつ奔放に書いている。そして古典的な型を重んじる批評家等も興味ある新しい劇として彼の作品を甘んじて受け入れようとする者も多かった。四幕の冒頭に「時」自らがコーラスの役目を担って観客達に Leontes が勝手に妄想した「嫉妬心」で、妻を監禁し、新しく生まれた王女を Polixenes との不義の子であると決め付けて捨てさせてから十六年もの年月が流れ去ったことを告げる。酷評をする批評家達は十六年もの長い時間のものを取り扱うのは、劇ではなく、小説であると息巻く。しかし観客である我々からすれば、全く支障はなく、この「時」のコーラスの言葉で、自然に舞台上の人々と共に十六年を経て、Leontes の暗い主観的時間から抜け出し、明るいボヘミアの地へと一気に進むことができる。そこでは牧歌的な風景がのんびりと広がり、不義の子として捨てられた少女 Perdita は羊飼いに拾われ、今は十六歳の美しい娘に成長していることを知る。お定まりの筋ではあるが、Polixenes の息子 Florizel もりっぱな王子に成長し、羊飼いの娘 Perdita に夢中である。この牧歌的で穏やかなところから観客はシシリアに戻され、Leontes がこの十六年間で「聖者」にも劣らぬ謹慎の日々を過ごしたことを伝えられる。観客は客観的な時の流れに従って、舞台上の役者と共に行くべき所へ行き、知るべき事を知る。そして最後のどんでん返しも Leontes 同様、信じられぬ驚きをもって、歓喜することになる。三幕二場でアポロの神託が読み上げられ、



Hermione の無実が明確となると同時に雷に打たれて倒れた Hermione が死んでしまったと Paulina から聞かされていたからである。十六年という長い歳月を劇にするなど以ての外であると評する前に、シェイクスピアのこの魔術のような筋の展開に喝采を浴びせて欲しいものである。シェイクスピアが自ら造りだした Paulina はまるで魔術師のように言う：

Music; awake her : strike!  
Tis time; descend; be stone no more; approach;  
Strike all that look upon with marvel; come;

・  
・  
・

楽師たち、像をお起こしして。  
時間です、台からおり、石であることをおやめください。  
さ、こちらへ。 皆様を驚かせるのです。

・  
・  
・

(V.iii, 98-109)

「おお、あたたかい！」手に触れた Leontes は叫ぶ。彼のその時の感動は観客達も共有する。Hermione が雷に打たれて気絶しただけで、実は生きていたのだという事実をこの最後になるまで Paulina 以外誰も（観客を含め）知らないように筋書きするとは実に巧妙な作りである。

劇の前半では主人公を主観的時間の世界に閉じ込め、アポロの神託で一気に客観的時間の世界に舞戻し、十六年という長い年月にわたる懺悔と謹慎を経験させ、最後には素晴らしい栄冠を勝ち得るのはロマンス劇の定型であるが、「時」と「明暗」をうまく組み合わせて観客達を退屈させないように考えられているのは興味深い。Leontes が「嫉妬」に取り付かれて誰の忠告も聞き入れず、ただ一人で「嫉妬」「恨み」「悔蔑」が渦巻く暗い内的世界、即ち、Leontes の主観の世界でずっと時間を過ごしているところへ、アポロの神託による真実の眩いばかりの光の世界が続き、コーラス役の「時」によって十六年にも渡る暗い厳しい世界について、さらりと告げられ、そして牧歌的な淡いホンノリとした穏やかな光の世界がその後に続き、最後には目をしっかりと開けていることができないような強烈な光の世界、即ち狂喜せずにはいられない「時」を舞台上の者も観客も経験するのである。

*Winter's Tale* の元になったシェイクスピアと同時代の小説家ロバート・グリーン *Pandosto* では Hermione は死亡し、おせっかいやきで、正義感の強い Paulina は存在しない。Hermione を生き返らせ、妃をひたすら面倒見つつ、最後の最後になるまでその事実と存在を隠し通し、あの感動的な許しと和解の場面を作ったのはシェイクスピア自身であり、「時」をコーラスとして登場させ十六年という長い年月を「夢うつつ」の内に経過させたのもシェイクスピア自身によるものだが、人間がちょっとしたことで感情のもつれを抱き、様々な間違いを犯すが、結局は「時」がその「もつれ」をほぐしてくれるまで気長に待った方が勝ちだというシェイクスピアからの訓示ともとれる結末ではないだろうか。

## 注

- 1) *Macbeth*に於ける「時」のテーマ、聖徳栄養短期大学紀要、23、64 (1992)
- 2) シェイクスピアの作品全体に渡る用語索引
- 3) *The Wheel of Fire*, p.153, Wilson knight
- 4) *Macbeth*, II,i,61, III,iv,138-139
- 5) 劇を構成する「三一致」の法則、即ち「時」、「所」、「筋」の統一を厳格に守って書かれているものを正統の劇と考えられたが、シェイクスピアの大部分の作品はそれを無視している。従ってそれらが正統な劇として受け入れられないまでも、荒唐無稽ではあるが、一種の魅力ある芝居として受け入れられる傾向があった。

## テキスト

*The New Shakespeare Winter's Tale* (by Sir Arthur Quiller-Qouch  
and John Dover Wilson, 1968)

*The New Shakespeare Macbeth* (by John Dover Wilson, 1970)

*The New Shakespeare Othello* (by Alice Walker & J.Dover Wilson, 1957 Cambridge)

「冬物語」、小田島雄志 訳、白水Uブックス、(東京) 白水社、1994

「オセロー」、小田島雄志 訳、白水Uブックス、(東京) 白水社、1994

「マクベス」、小田島雄志 訳、白水Uブックス、(東京) 白水社、1994

## 参考文献

Tillyard, T.M.W., *Shakespeare's Last Plays*, Shatto & Windus, 1938

Knight, G. Wilson, *The Wheel of Fire*, University Paperbacks, 1974

木村俊夫、「時の観点からみたシェイクスピア劇の構造」、(東京) 南雲堂、1971

戸田 尚、「シェイクスピア研究 (シェイクスピアの生涯、批評史)」、(東京) 大盛堂書房、1969  
パッチ、ハワード・ロリン、(黒瀬 保 訳)「中性文学に於ける運命の女神」

---